

## 子どもの居場所に関する研究

### —居場所と自己受容感との関係—

瑞慶覧 聡子（長崎大学大学院教育学研究科）

村 田 義幸（長崎大学教育学部）

#### 問題および目的

現代はストレスフルな時代であるといわれる。多くの人々が生活の中でストレスを感じ、それを何とか対処しながら生きている。子どもの主たるストレスサーとして生物的要因と社会的要因が挙げられる。生物的要因とは、思春期・青年期特有の心身の不安定さからくる不安や葛藤、悩みなどである。また、社会的要因としては、親子関係、学校における教師—生徒関係や生徒間の関係などの対人関係、子どもを取りまく社会状況や社会環境の変化などがある。少子・高齢化、高度情報化、高学歴化の波の中で子どもたちの生活に大きな変化が生じている。仲間と、戸外で、体を使って楽しむ遊びから、マス・メディアやTVゲームとの接触による「孤立型の遊び」への変化、塾通いや稽古事などに費やす時間の増加によるゆとりのない生活等により、他者との関わりの希薄化、コミュニケーション能力の低下が子どもたちに見られるようになってきた。同年代との関係だけでなく、青少年異年齢・異世代集団との交流の減少は、家庭や地域社会の教育力の低下と相まって、子どもたちのストレスを高めるだけでなく、規範意識の低下をもたらしている。その結果としていじめ、不登校、学業不振など学校を巡る問題、社会の中での悲惨な事件の発生につながっていると考える。

青年期の発達課題の一つに自我の確立がある。自我に目覚め、自我を模索する過程において他者と交わり、他者と自分を比較するなかで自己嫌悪や劣等感を、あるいは、自尊感情や優越感を抱きながら、青年は、少しずつ自己を受容するようになる。社会的価値や望ましさととらわれずに自己を受容できるようになるためには、他者によって受容されることが重要となる。あるがままの自分を評価されることなく理解され、受容される経験は、自己受容を高め、結果として心身の健康の維持・増進につながるといえる。自己を受容してくれる他者のいる、安心できる場、居場所があるということは、心身の健康の維持・増進、ストレスへの適切な対処につながると考える。

瑞慶覧・野下（2006）は、子どもの居場所について、その場で一緒に活動する相手および子どもが求める心理的機能が、その場を「居場所」と感じる際に大きな役割を果たしていることを確認した。その研究課題の1つとして、「場所」「相手」「行動」「役割」「心理的機能」の5つ以外にも、居場所を構成する要素がないか検討することがあげられた。

そこで、子どもにとって重要な役割を果たす「居場所」を構成する要素として、自己を受け容れる「自己受容感」が関連するのではないかと考え、児童期から青年期にある子どもを調査対象とし、両者の関係を検討していくことを目的とした。

本研究では、居場所を「自分が落ち着けたり、安心したりできる、居心地のいい空間」、自己受容感を「弱点も含んだありのままの自分を、歪めることなく認識し、自分自身として受け容れる程度」と定義した。

## 方 法

### (1) 調査対象者

長崎市内の公立小学校1校の小学5年生および6年生、公立中学校1校の中学2年生、国立大学1校の学生の男女、計431名を対象とした。

### (2) 調査時期と手続き

調査は、2008年10月中旬に実施し、質問紙法により、集団で行った。

### (3) 調査内容

質問項目は、居場所となる場所（家、学校、その他）とその場所に一緒にいる人（家族、友達、その他、自分だけ）、居場所に求める心理的機能および自己受容感についてである。

#### 1) 「居場所」について

居場所については、瑞慶覧・野下（2006）を参考として、28項目からなる質問紙を作成した。居場所に求める心理的機能を調査するにあたり、本研究では8因子24項目（表1参照）とした。

表1 「居場所に求める心理的機能」に関する質問項目

因子	質問内容
I 被受容感	3 自分はこのメンバーである。 14 人と一緒にいられる。 20 自分は大切にされている。
II 精神的安定	1 安心する。 13 無理をしないでいられる。 19 楽しい
III 行動の自由	2 自分の物がある。 9 寝ることができる。 15 自分の好きなことができる。
IV 思考・内省	4 ポーっと考えこむことがある。 16 自分のことについてよく考える。 22 1日のことを振り返る。
V 自己存在感	5 好きな物がある。 10 何かに夢中になれる。 23 自分はうまくやれる。
VI 他者からの自由	8 人に会わなくていい。 17 他人のペースに合わせなくていい。 24 人を気にしなくていい。
VII 利益	6 ほしい物が手に入る。 11 何でも言うことを聞いてくれる人がいる。 18 ごほうびがもらえる。
VIII 自己実現	7 いろいろなことにチャレンジできる。 12 自分を成長させることができる。 21 自分の役割がある。

2) 「自己受容感」について

自己受容感については、大出・澤田（1988）の研究を参考として、18 項目のうち9項目を小学生も理解できるような表現に変更し、新たに5項目を加えた23項目（表2参照）からなる質問紙を作成した。

表2 自己受容尺度の変更前と変更後

変更前	変更後
1. 私は、自分は自分とわりきることができる。	1. 私は、自分は自分のままでいいと思う。
2. 私は、できれば今の自分と違う自分になりたい。	2. 私は、できれば今の自分と違う自分になりたい。
4. 私は、理想通りではないが、自分というものが好きだ。	③. 私は、男または女としての自分がきらいだ。 4. 私は、理想どおりではないが、自分のことが好きだ。
5. 私は、何か失敗すると、自分はだめな人間だと思うことがよくある。	5. 私は、何か失敗すると、自分はだめな人間だと思うことがよくある
7. 私は、人に誇るものが何もない。	6. 私は、人と比べて、いいと思うところがないもない。
8. 私は、自分に自信がある。	7. 私は、自分に自信がある。
10. 私は、今の自分に満足している。	8. 私は、今の自分に満足している。
11. 私は、人から必要とされていると思う。	⑨. 私は、自分の性格がきらいだ。 10. 私は、人から必要とされていると思う。
13. 私は、何か人のために役にたっている。	11. 私は、何か人のために役にたっている。
14. 私は、自分のことが嫌いだ。	12. 私は、自分のことがきらいだ。
16. 私は、他の人がうらやましい。	13. 私は、他の人がうらやましい。
17. 私は、自分に失望することがよくある。	14. 私は、自分がかかりすることがよくある。 ⑮. 私は、自分のスタイルに満足している。 ⑯. 私は、自分の顔がきらいだ。 ⑰. 私は、自分の健康に満足している。
18. 私は、誰からも必要とされていない。	18. 私は、だれからも必要とされていない。
19. 私は、自分には嫌なところがあるので、自分が嫌いだ。	19. 私は、自分にはいやなところがあるので、自分がきらいだ。
20. 私は、自分が存在していること自体に意味があると思う。	20. 私は、自分が今生きていることに意味があると思う。
21. 私は、今の自分を大切にしている。	21. 私は、今の自分を大切にしている。
22. 私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思わない。	22. 私は、自分の一つの面がだめだからといって、自分全体がだめだとは思わない。
23. 私は、欠点があっても、自分が好きだ。	23. 私は、自分に悪いところがあっても、自分が好きだ。

※ 変更前の項目番号と変更後の項目番号は一致していない。番号に○がついている項目は、新たに加えた項目である。

※ 反転項目番号（変更後）…2、3、5、6、9、12、13、14、16、18、19

1)、2)の全項目について「とてもよくあてはまる」「あてはまる」「あまりあてはまらない」「全然あてはまらない」の4件法で回答を求め、あげた順に4～1点を与えている。得点範囲は、1)が3～12点、2)が23～92点である。

## 結果および考察

### (1) 居場所の実態

居場所があると回答している人は全体の9割以上おり、大半の人が居場所を持っている。また、居場所を複数もつ人が多く、その複数の居場所の中で最も居心地のいい空間として「家で家族と」いる空間をあげる人が多かったが、年齢段階があがるにつれて少なくなっている。中学生は「学校で友達と」、大学生は「家で自分だけで」いる空間をあげる人も多い(表3および図1, 2, 3参照)。

居場所がないと回答している人は「家で家族や自分だけ」でいたり、「学校で友達と」いたりする空間、または「他の場所で友達や自分だけ」でいる空間を居場所にした人が多い(表4および図4, 5, 6参照)。

家は衣食住など生活の中心の場であり、子ども自身の成長を見守ってくれる家族がいる場であるため、その慣れ親しんだ空間が安心して過ごせる空間になるのだと考える。小学生は家族に頼る機会が多く、その家族と共に生活する家が重要な居場所となるが、中学生は思春期特有の葛藤や悩みを、友達との精神的交流のなかで互いに理解し合い、心の支えとするのに加え、部活動や学校行事の運営など友達との関わりを大切にする機会が多いため、学校を居場所と感じる人も多いと考える。大学生が家で自分だけの空間を居場所と感じる人も多いのは、一人暮らしの増加、サークルやアルバイトなど活動範囲の拡張により、自分だけで行動したり、考えたりすることで、自分自身を振り返り、落ち着いた時間を過ごすためだと考える。また、小学生に比べ、中学生および大学生が、家で家族という空間以外の空間を居場所と感じる人も多いのは、親からの心理的独立の様子が現れているとも考える。

居場所になってほしい場所の全体的傾向として、主に生活空間にある、家で家族または自分だけでいる空間や学校で友達という空間を居場所にしたい人と、友達や自分だけで過ごす空間というように、その場所に一緒にいる人を重視する人がいると考えられ、前者は自分が主に過ごす身近な空間で居心地よく過ごしたいという思いがあり、後者は自分自身や他者との関係について多少の問題を抱えている可能性が考えられ、自分が過ごしやすい空間になるためには、同じ空間にいる人の存在が大きいのではないかと考える。

表3 各年齢段階の居場所がある人の一番の居場所およびその居場所で一緒にいる人

【一番の居場所(その居場所で一緒にいる人)で記載】

	家 (家族)	家 (友達)	家 (自分だけ)	学校 (友達)	学校 (自分だけ)	学校 (その他)
小学生	68%	0%	17%	3%	1%	0%
中学生	50%	1%	24%	18%	0%	0%
大学生	42%	1%	41%	6%	0%	0%
	その他 (家族)	その他 (友達)	その他 (自分だけ)	その他 (その他)		
小学生	0%	3%	4%	4%		
中学生	2%	3%	0%	2%		
大学生	0%	7%	0%	3%		

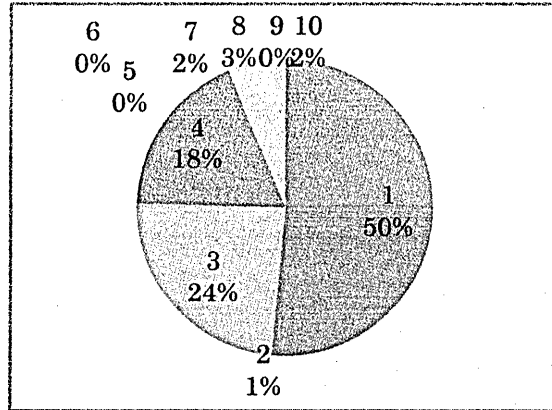
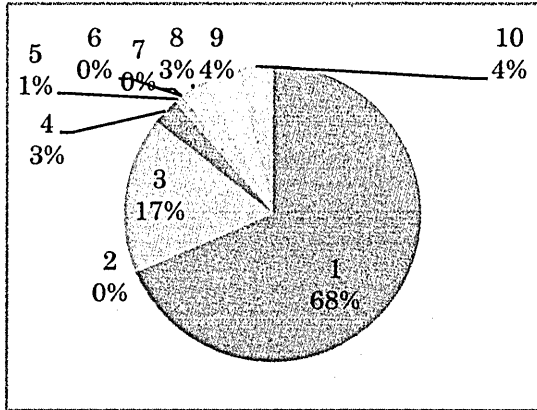


図 1 小学生の居場所がある人の一番の居場所  
所およびその居場所と一緒にいる人

図 2 中学生の居場所がある人の一番の居場所  
所およびその居場所と一緒にいる人

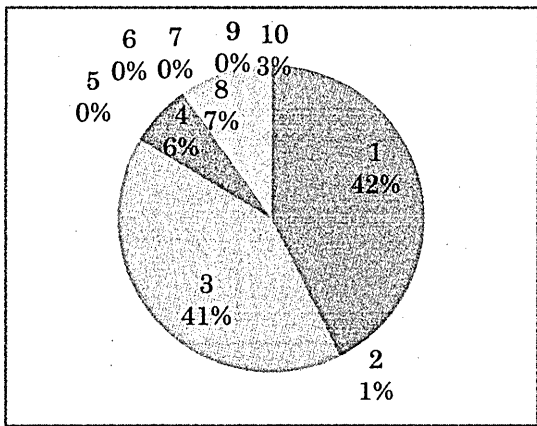


図 3 大学生の居場所がある人の一番の居場所  
およびその居場所と一緒にいる人

- 居場所  
(一緒にいる人)
1. 家 (家族)
  2. 家 (友達)
  3. 家 (自分だけ)
  4. 学校 (友達)
  5. 学校 (自分だけ)
  6. 学校 (その他)
  7. その他 (家族)
  8. その他 (友達)
  9. その他 (自分だけ)
  10. その他 (その他)

表 4 各年齢段階の居場所がない人の居場所に一番なつてほしい場所およびその居場所と一緒にいてほしい人【一番の居場所(その居場所と一緒にいる人)で記載】

	家 (家族)	家 (友達)	家 (自分だけ)	学校 (友達)	学校 (自分だけ)	学校 (その他)
小学生	29%	14%	14%	0%	0%	0%
中学生	7%	0%	50%	7%	0%	0%
大学生	12%	0%	37%	25%	0%	0%
	その他 (家族)	その他 (友達)	その他 (自分だけ)	その他 (その他)		
小学生	0%	29%	14%	0%		
中学生	0%	14%	22%	0%		
大学生	0%	13%	13%	0%		

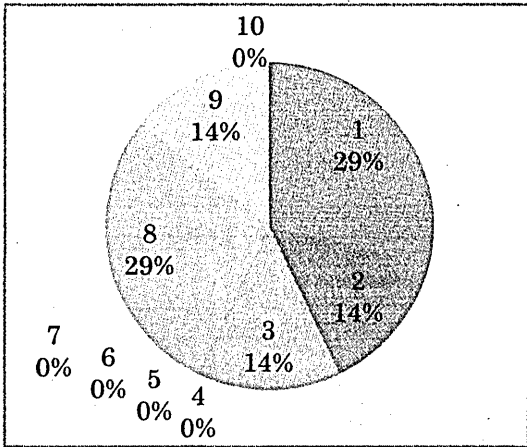


図4 小学生の居場所がない人の居場所  
に一番なってほしい場所および  
その居場所で一緒にいてほしい人

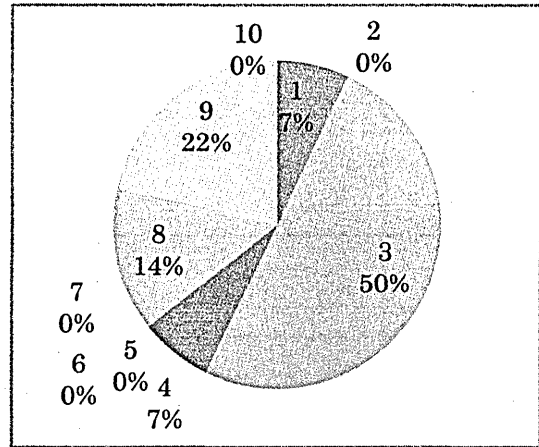


図5 中学生の居場所がない人の居場所  
に一番なってほしい場所および  
その居場所で一緒にいてほしい人

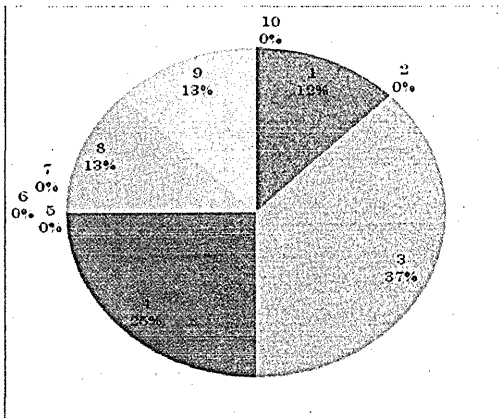


図6 大学生の居場所がない人の居場所  
に一番なってほしい場所および  
その居場所で一緒にいてほしい人

- 居場所  
(一緒にいる人)
1. 家 (家族)
  2. 家 (友達)
  3. 家 (自分だけ)
  4. 学校 (友達)
  5. 学校 (自分だけ)
  6. 学校 (その他)
  7. その他 (家族)
  8. その他 (友達)
  9. その他 (自分だけ)
  10. その他 (その他)

(2) 居場所に求める心理的機能

小学生、中学生および大学生の全てを含めた全体対象が、居場所に求める心理的機能因子得点の高さは、次のような順位であった(表5,6参照)。

- 1位 精神的安定 (Ⅱ)
- 2位 行動の自由 (Ⅲ)
- 3位 被受容感 (Ⅰ)、自己存在感 (Ⅴ)
- 5位 思考・内省 (Ⅳ)、他者からの自由 (Ⅵ)、自己実現 (Ⅷ)
- 8位 利益 (Ⅶ)

ここで、上記の8因子における年齢段階での変化をみると「思考・内省」および「他者からの自由」の得点が「小学生<中学生<大学生」と年齢段階があがるにつれて、高くなっていた(表7参照)。

小学生から大学生まで、安心でき、落ち着くことのできる場を居場所として求め、その場では、自分の行動を制限されることなく、自分の好きなように行動できることを望んでいるのである。また、他者との関係も重要であり、その場所で自分がどういう位置にいて、どの程度受け容れられているか、ということが大切であることが明らかになった。

年齢に伴う変化については、年齢段階があがるにつれて、自分を客観的にみつめるようになり、社会での責任ある行動を自ら望むようになるため、自分はどうなる価値観や世界観をもち、何のために生きていくのか、というような問題を考え、自分なりの答えを見つけたり、自己による決定で自由に活動したりできる場を求めるようになり、「思考・内省」や「他者からの自由」の得点が上昇すると考える。

表 5 全体の居場所に求める心理的機能因子得点の平均値と標準偏差

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
平均	9.561	10.638	10.341	8.441	9.585	8.327	6.508	8.476
標準偏差	2.401	1.437	1.813	2.208	1.841	2.388	2.215	2.395

表 6 全体の居場所に求める心理的機能因子得点間の分散分析結果と有意差判定

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
I		1.077	0.780	-1.121	0.023	-1.234	-3.053	-1.086
II	**		-0.297	-2.197	-1.053	-2.311	-4.130	-2.162
III	**	*		-1.900	-0.756	-2.014	-3.833	-1.865
IV	**	**	**		1.144	-0.114	-1.933	0.035
V		**	**	**		-1.258	-3.077	-1.109
VI	**	**	**		**		-1.819	0.149
VII	**	**	**	**	**	**		1.968
VIII	**	**	**		**		**	

※上欄は 2 因子の平均値の差（列因子得点－行因子得点）、

下欄の「\*\*」は「1%有意」、「\*」は「5%有意」を示している。

表 7 各年齢段階の居場所に求める心理的機能因子得点の平均値・標準偏差および有意差判定

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
小学生	平均	9.964	10.848	10.268	7.804	9.723	7.375	6.393	8.848
	標準偏差	2.603	1.508	2.066	2.176	2.157	2.294	2.387	2.544
中学生	平均	9.402	10.566	10.302	8.328	9.587	8.429	6.709	8.497
	標準偏差	2.401	1.445	1.768	2.233	1.726	2.334	2.204	2.409
大学生	平均	9.446	10.562	10.462	9.154	9.462	9.000	6.315	8.123
	標準偏差	2.189	1.353	1.643	2.006	1.708	2.299	2.065	2.203
有意差判定					**		**		

\*\* : 1%有意 \* : 5%有意

I : 被受容感      III : 行動の自由      V : 自己存在感      VII : 利益  
 II : 精神的安定      IV : 思考・内省      VI : 他者からの自由      VIII : 自己実現

### (3) 自己受容感

自己受容感を年齢段階別に比較してみると(表8参照)「中学生および大学生」より「小学生」の自己受容感の方が高かった。居場所との関係でみると(表9参照)、居場所で「友達と一緒にいる人および自分だけにいる人」より「家族と一緒にいる人」の自己受容感の方が高かった。さらに、居場所で「家族と一緒にいる人」に関して、年齢段階別に比較してみると「中学生および大学生」より「小学生」の自己受容感が高く、表8と同様の傾向が認められた。

年齢に伴う傾向に関しては、自己を客観的に捉えるようになると、自分自身についてより深く考えるようになり、具体的な理想像を抱くようになると考え、ありのままの自分を素直に受け容れにくくなり、上記の結果に繋がったと考える。

居場所で一緒にいる人についての傾向は、身近にいる大切な存在の人から自分が受け容れられているという他者受容が一因と考え、特に小学生は、自己受容感の年齢に伴う傾向が影響していることも関係するが、さらに親からの心理的独立が不十分であることも要因だと考えられる。

表8 各年齢段階の自己受容感得点の平均値・標準偏差および有意差判定

	小学生	中学生	大学生
平均	67.143	58.529	59.477
標準偏差	11.472	11.538	10.614
有意差判定	** (中学生=大学生<小学生)		

\*\* : 1%有意 \* : 5%有意

表9 一番の居場所で一緒にいる人ごとの自己受容感得点の平均値・標準偏差および有意差判定

年齢段階	一緒にいる人	家族	友達	その他	自分だけ	「一緒にいる人」間の差
	全体	平均値	63.561	60.375	63.786	
	標準偏差	10.795	10.466	10.991	11.759	
小学生	平均値	69.425	68.000	65.167	61.700	* (自分だけ<家族)
	標準偏差	10.621	10.973	14.757	10.418	
中学生	平均値	61.102	58.780	63.750	57.190	
	標準偏差	10.138	10.725	8.921	11.559	
大学生	平均値	59.462	61.750	58.800	59.574	
	標準偏差	8.412	8.461	11.039	12.562	
年齢段階間の差	有意差判定	** (中学生=大学生<小学生)				

\*\* : 1%有意 \* : 5%有意



#### (4) 居場所の有無との関係

居場所に求める心理的機能である「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「自己存在感」「自己実現」の5因子において、居場所が「ない」と回答した人より「ある」と回答した人の方が高かった(表10参照)。

自己受容感についても、居場所が「ない」と回答した人より「ある」と回答した人の方が高かった(表11参照)。

居場所に求める心理的機能については、居場所は自分の存在とともにあるため、居場所が「ない」と回答した人は自分を見失い、自分が集団や社会の中でどのような位置に存在しているのかわからなくなっていると捉えることもでき、不安な気持ちを感じやすい状態にあると考えることから、5因子において、居場所が「ある」と回答した人の方が高いといえる。また居場所が「ない」と回答した人にとって、居場所は想像上のものであり、実際に心理的機能を居場所で体感しているかどうか、影響を与えていると考える。自己受容感については、居場所は安心できる居心地のよい場所であり、自分の気持ちを切り替えられる場ともなるため、居場所が「ある」と回答した人は快の気持ちを抱くことができ、居場所で過ごす自己を肯定的に受けとめる機会があり、自己受容感の上昇につながると考える。

表10 居場所の有無ごとの居場所に求める心理的機能因子得点の平均値・標準偏差および有意差判定

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
あ る	平均	9.684	10.701	10.400	8.448	9.642	8.341	6.522	8.545
	標準偏差	2.318	1.325	1.722	2.196	1.791	2.325	2.191	2.361
な い	平均	7.862	9.759	9.517	8.345	8.793	8.138	6.310	7.517
	標準偏差	2.887	2.385	2.694	2.409	2.320	3.182	2.565	2.694
有意差判定		**	**	**		**			**

\*\* : 1%有意 \* : 5%有意

I : 被受容感    III : 行動の自由    V : 自己存在感    VII : 利益  
II : 精神的安定    IV : 思考・内省    VI : 他者からの自由    VIII : 自己実現

表11 居場所の有無ごとの自己受容感得点の平均値・標準偏差・有意判定

年齢段階	居場所の有無		「居場所の有無」間の差	
	ある (n=402)	ない (n=29)		
全体	平均値	61.908	49.207	** (ない<ある)
	標準偏差	11.153	14.153	
小学生	平均値	67.629	59.857	
	標準偏差	11.116	15.060	
中学生	平均値	59.680	44.143	** (ない<ある)
	標準偏差	10.667	12.715	
大学生	平均値	60.180	48.750	** (ない<ある)
	標準偏差	10.188	11.901	
年齢段階間の差	有意差判定	** (中学生=大学生 <小学生)	* (中学生 <小学生)	

\*\* : 1%有意 \* : 5%有意

## 総合考察

居場所と自己受容感との関係はあるといえる。居場所の有無は、自己受容感の高さと関連し、子どもが安心して活動できる場が、子どもにとって居場所的存在および自己を受け容れる要因として、影響力をもつことがわかった。

家や学校など生活の大半を過ごす場で、家族や友達と安心して過ごせ、さらにそのような居場所が多くあれば、他者との関わりの中で自己を肯定的に捉える機会も増える。一方、思春期の特徴や自我の確立により、自分だけで過ごす時間も大切な存在となる。子どもは、成長の過程で自分に適した居場所を見つけていき、いくつかの居場所をもつが、その各居場所の不足部分を補い合わせ、自分にとってうまく機能するよう居場所を活用することが大切である。つまり、他者との空間と自分だけの空間とを使い分け、自分とうまく付き合って生活することが、自己受容感の高まりと関連すると考える。居場所がない人は、自己の葛藤や悩みを受容し難く、自分の中だけに閉じこもった狭い自我形成になる可能性も伺えるため、周りの人がその人にとって理解し受容してくれる存在となったり、その人が居心地がよいと感じる空間を提供したりするなどのサポートが必要だと考える。

居場所は、本人がどの要素に価値づけするかによって違い、誰もが同じ場や空間を好むわけではない。しかし居場所での他者との良好な関係の重要性は、共通するものといえる。今日、社会問題の1つとしてあげられる学校生活における問題を考える際にも、子どもと子ども、子どもと教師、子どもと家族との良好な関係を築くことのできる雰囲気および環境づくりが必要であり、大人が子どもを理解し、認め、受け容れることが大切である。このことを通して、子どもの自己受容感が高まり、学校を居場所として捉えるきっかけになるのではないかと考える。居場所の中でも、自分だけの空間ではなく、他者と関わりがもてる空間で自己受容感が高めることができると考える。

## 今後の課題

本研究では年齢段階間の変化も踏まえ、居場所と自己受容感との関係を検討するために、小学生、中学生、大学生を調査対象者としたが、高校生を対象者に含める必要があったと考え、今後の研究への改善点とする。加えて、分析結果から今後の研究課題として、1つ目に、自分だけで過ごす空間と他者と過ごす空間との違いから、自己受容感を高める空間の要因の検討があげられる。2つ目に、居場所の数が本人の社交性の高さや活動範囲の広さと関連があると示唆されたため、社会でよりよく生活できる能力の度合いを指すところの知能指数EQのうち「社会性」「協調性」「積極性」と自己受容感との関係性の検討があげられ、それらを踏まえ、今後、子どもの居場所に関する研究を深めていきたい。

## 引用・参考文献

- 大出美知子・澤田秀一 1988 『自己受容に関する一研究 ―様相と関連要因をめぐって―』 カウンセリング研究 Vol.20 No.2 128-137  
瑞慶覧聡子・野下なずな 2006 『子どもの居場所に関する研究』